

中・高年齢の剣道愛好者における剣道稽古に関する意識・実態調査 [2]

——剣道の海外普及に対する考え方を中心にして——

志 村 進

1. 研究目的

月刊誌『武道』に、「中高年齢層の剣道人口が増えてきている。(中略)特に女性で60歳代で初段をとった人もいる」という報告を中村らが発表している^①。実際、各地のスポーツ施設では近年、女性を含む中高年齢層の剣道愛好者が稽古に汗を流す姿を多く見るようになった。剣道の昇段審査の会場でも、この年齢層の受審者の姿が多数見受けられる。

また、剣道の試合も、全日本実業団〈女子・高壮年〉剣道大会や高齢者武道大会等が盛会に開催されている。表1は、全国老人福祉助成会^②が主催した第22回全日本高齢者武道大会剣道の部における年齢別出場者の分布であるが、90才代の高齢者が3名も出場して試合を行っている。この高齢者武道大会は年に一回、日本武道館で開催されている。全国各地から参加した高齢の剣道愛好者が、一年間の修業の成果を発揮する機会であり、参加者たちの試合を通しての人間交流の場にもなっている。90才代の高齢になっても公式試合が可能であるという事実一つ見ても、正に剣道は「己の修練の心がけ一つで身体的健康と気力の充実、さらに人間関係の醸成に役立てることのできる、生涯スポーツに相応しい種目である」^③と見えよう。

表1 第22回全日本高齢者武道大会剣道の部年齢別出場者数

年齢	55-57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	計	
特																			16	20	24	20	8	1	9	7	11	8	7	3	7	4	4	1	1	1	1	65	
組A														22	20	27	19	18																					88
組B									17	15	13	10	14																										70
組C	5	5	6	8	5	12	11	7																														59	

注) 第22回大会パンフレットより作成

さらに剣道は日本国内ばかりでなく、国外でも数多くの愛好者を得ている。第11回世界剣道選手権大会が2000年3月24～26日の3日間、アメリカ・カリフォルニア州サンタクララで36カ国からの参加者を得て盛大に開催された。実に、剣道の海外普及には目覚ましいものがある。

本稿は教育学部論集第48号に掲載した拙稿「中・高年齢の剣道愛好者における剣道稽古に関する意識・実態調査」の続編であり、中・高年齢の剣道愛好者の稽古や試合に対する意識と、剣道の海外普及やオリンピック参加に対する意識を検討しようとするものである。

2. 研究方法

(1) 被験者は東京西部地域で剣道を愛好する30歳以上の男性147名である。(抽出方法など調査

の詳細は本誌48号の拙稿を参照されたい。))

(2) 本稿で分析を行う8項目は、先に報告した質問項目の続きであり、質問紙全体では後半部分に当たるものである。具体的な質問の構成は以下の通りである。

- ①剣道を生涯武道として継続できると思いますか (賛否, コメント)
- ②1ヵ月間の稽古回数について (具体的回数)
- ③对人的技能の稽古の実施について (実施の有無, 留意点)
- ④所属団体以外での稽古の有無について (実施の有無)
- ⑤中・高年齢者だけの稽古会実施の希望について (希望の有無, コメント)
- ⑥社会人剣道大会や中・高年齢者剣道大会への出場希望について (希望の有無, コメント)
- ⑦海外普及について (賛否, コメント)
- ⑧オリンピックへの参加について (賛否, コメント)

3. 調査結果

(1) 剣道を生涯武道として継続できると思いますか

この質問に対しては自由記述による様々な表現の回答を得たので、その内の何点かを紹介すると、①生涯武道としたい、②自分の年齢なりにできる非常によいスポーツと思う、③是非続けたいと思う、④継続したい・定年後も生活の節目や糧としたい・継続できるよう健康に配慮する、⑤体力の続く限りやりたいと思う、⑥足腰が立つ限り死ぬまで可能、⑦生涯つづけたい、⑧継続中・生き甲斐、等々である。

30才代から70才代までの回答者147名の全員が剣道を生涯武道として継続できると答えており、上記のコメントからも生涯スポーツとして剣道がいかに魅力あるものか十分に伺い知ることができよう。また、回答者の中には剣道に出会うまでに、数々のスポーツを経験してきた者も少なからずいるが、最終的に剣道に巡り合い、剣道を行うことを生き甲斐に感じ日々稽古に励んでいる。

(2) 一ヵ月間の稽古回数について

稽古回数は経験年数と段位や年齢、それに職業や所属団体での役割等で異なることが予想されるが、本稿では一ヵ月間で行う稽古を、1回から9回行っていると回答したグループと10回以上行っていると回答したグループに分けて整理した。表2-1は「稽古回数と段位」で、表2-2は「稽古回数と剣道歴」である。段位群の初段から五段までの者と、剣道歴群の30年未満の者に1~9回の稽古を行って者の割合が多く見られる。同時に、10回未満のグループは「健康管理・心身の鍛練」を剣道開始の動機にあげている30才以降での開始者が多いグループであり、俗に「仕事に脂が乗る時期」といわれる40~50代の多忙な者の多いグループでもある。仕事との関係からくる精神的な疲労感や重圧感を解消・発散することを主なねらいと考えるなら、週に1, 2回の稽古回数は適当な頻度といえるだろう。

表2-1 稽古回数と段位

		段位						
		初段	2段	3段	4段	5段	6段	7段
稽古回数	10回未満 90人	6 (100.0)	5 (71.4)	14 (73.7)	16 (80.0)	29 (61.7)	12 (48.0)	8 (44.4)
	10回以上 52人	0	2 (28.6)	5 (26.3)	4 (20.0)	18 (38.3)	13 (52.0)	10 (55.6)
計		6	7	19	20	47	25	18

注) n=142 () 内の数値は百分率

表2-2 稽古回数と剣道歴

		剣道歴			
		1~10年	~20年	~30年	31年以上
稽古回数	10回未満 90人	24 (75.0)	32 (68.1)	23 (56.1)	11 (50.0)
	10回以上 52人	8 (25.0)	15 (31.9)	18 (43.9)	11 (50.0)
計		32	47	41	22

注) n=142 () 内の数値は百分率

しかし六段・七段の高段位になると、10回以上の稽古を行っている者の割合が多くなっている。また、剣道歴が長くなるに従い、10回以上の稽古実施者の割合が多くなる傾向が見られ、30年以上の者では半数の者が10回以上の稽古を行っている。稽古回数が増えるということは、所属団体の後進の指導に当たる日数が多くなるということも考えられるが、経験年数を重ね段位が上がるにつれて、更なる技術的・精神的な向上を求め、「自分の剣道の確立」を目指しての稽古段階に入るのではないかと考えられる。

(3) 対人的技能の稽古の実施について

次に、「一回の稽古時間内に対人的技能（しかけていく技・応じていく技）の稽古を行いますか」との質問に対する回答を段位（表3-1）および剣道歴（表3-2）でクロス集計した。

表3-1 稽古内容と段位

		段位						
		初段	2段	3段	4段	5段	6段	7段
対人技能	行う 120人	5 (83.3)	5 (71.4)	15 (88.2)	15 (79.0)	38 (82.6)	25 (96.2)	17 (94.4)
	行わない 17人	1 (16.7)	2 (28.6)	2 (11.8)	4 (21.1)	6 (13.0)	1 (3.8)	1 (5.6)
	時々行う 2人	0	0	0	0	2 (4.4)	0	0
計		6	7	17	19	46	26	18

注) n=139 () 内の数値は百分率

剣道を長年経験している者が一様に感ずることは、年齢と共に衰えるスピード感覚である。その衰えをカバーするのが「理合」（理合は問合いにおける打突要領と機会）であるが、その理合を得るためには、対人的技能の稽古はなくてはならないものである。特に中・高年期より剣道を開始した者の中には、「気・剣・体一致の打突」という理論的なことは承知していても身体が思うように動かず、打突の際にタイミングが外れる上に力任せで叩きつけるという独特

の稽古をする者もあり、それ故に対人的技能の稽古を十分行なうことが必要となる。

表3-2 稽古内容と剣道歴

		剣道歴			
		1~10年	~20年	~30年	31年以上
対人技能	行う 120人	25 (83.3)	36 (81.8)	39 (92.9)	20 (87.0)
	行わない 17人	5 (16.7)	7 (15.9)	3 (7.1)	2 (8.7)
	時々行う 2人	0	1 (2.3)	0	1 (4.3)
計		30	44	42	23

注) n=139 () 内の数値は百分率

幸いに、回答者の「稽古上の留意点」⁽⁶⁾には、「間合いの稽古」、「基本に忠実に」、「初心に戻る」、「形の稽古」、「美しい剣道」、「自分の欠点を直す」、「基本の完成」、「自分の剣道の確立」等々の記述が多く見られた。実際、表3-1および表3-2が共に示す通り、段位や剣道歴に関係なく、対人的技能の稽古に打ち込んでいると回答した者の割合が多い。特に、21年以上の剣道の経験を重ねている者と六・七段位の者の実施者が90%以上と高い数値を示している。このことから熱達者は「剣道は、互いに相手の動きに応じて攻防しあう対人的な格闘技」⁽⁶⁾であり、「千変万化の変化に富む対人的な攻防の技能を中核として工夫されなくてはならない」⁽⁶⁾ことをよく承知して稽古に励んでいると推察される。

(4) 所属団体以外での稽古の有無について

剣道の稽古には遠征合宿、遠征試合、出稽古等々、所属団体以外に出向いて稽古を行う方法もとられているが、これは「一定の内容を習得した後、その環境をぬけ出して、他の地に相手を求めて試合したり、稽古して修行することで、精神的にも技術的にも、上達を期すために必要な方法」⁽⁷⁾であり、従来から盛んに行われている。

表4-1 出稽古と段位

		段位						
		初段	2段	3段	4段	5段	6段	7段
出稽古	している 89人	2 (33.3)	3 (42.9)	8 (42.1)	15 (75.0)	29 (61.7)	19 (70.4)	13 (68.4)
	していない 56人	4 (66.7)	4 (57.1)	11 (57.9)	5 (25.0)	18 (38.3)	8 (29.6)	6 (31.6)
計		6	7	19	20	47	27	19

注) n=145 () 内の数値は百分率

表4-2 出稽古と剣道歴

		剣道歴			
		1~10年	~20年	~30年	31年以上
出稽古	している 89人	14 (43.8)	31 (66.0)	31 (75.6)	13 (52.0)
	していない 56人	18 (56.3)	16 (34.0)	10 (24.4)	12 (48.0)
計		32	47	41	25

注) n=145 () 内の数値は百分率

「日本の芸能では、古来より修練を守・破・離の三つの段階（過程）に分けて行うことを理念としているが、これは剣道においても強く守られて」^⑧いと言われるごとく、段位群の四段以上の者と剣道歴群の11年以上の者に所属団体以外での稽古実施者の割合が多く見られる（表4-1、表4-2参照）。そこには正に「破」の段階に入ったという意欲の現れが感じられる。西東京剣道連合会では、27団体が持回りで月一回合同稽古会を行っているが、参加者に四段以上の剣道愛好者の姿が多く見られる。四段以上に昇段すると自分の剣道に自信がつくのであろう。また、他団体の剣道愛好者との剣道を通しての人間関係を深めつつ稽古の楽しさを味わうことができるからでもあろう。

なお、三段以下の者、剣道歴10年以内の者に、所属団体以外での稽古実施者の割合が少ないのは、所属団体に教師や先輩の指導を忠実に守り、いまだ基礎的修業時代の「守」の段階にあると心得ている故と推察される。

(5) 中・高齢者だけの稽古会実施の希望について

所属団体以外に各地域で合同稽古会や各々の職域での稽古会等は活発に行われている。だが開始時期が30才以降の中・高齢者を中心としての稽古会は、西東京地域では行われていない。そこで回答者の希望は如何がかと尋ねて得られた結果が表5-1と表5-2である。

表5-1 稽古会の希望と段位

		段位						
		初段	2段	3段	4段	5段	6段	7段
稽古会	希望する 112人	6 (100)	5 (71.4)	12 (70.6)	16 (84.2)	40 (87.0)	21 (87.5)	12 (85.7)
	希望しない 16人	0	1 (14.3)	3 (17.7)	2 (10.5)	6 (13.0)	2 (8.3)	2 (14.3)
	時間がない 5人	0	1 (14.3)	2 (11.8)	1 (5.3)	0	1 (4.2)	0
	計	6	7	17	19	46	24	14

注) n=133 () 内の数値は百分率

表5-2 稽古会の希望と剣道歴

		剣道歴			
		1~10年	~20年	~30年	31年以上
稽古会	希望する 112人	25 (80.7)	35 (83.3)	35 (87.5)	17 (85.0)
	希望しない 16人	4 (12.9)	5 (11.9)	4 (10.0)	3 (15.0)
	時間がない 5人	2 (6.5)	2 (4.8)	1 (2.5)	0
	計	30	44	42	23

注) n=139 () 内の数値は百分率

稽古会を希望する者が圧倒的に多人数である。剣道は老若男女が共に稽古を楽しむことのできるスポーツであるが、中でも年齢の近い者同士の稽古は実に楽しく、しかも技量の発揮にも力が入るものである。中高年齢期に入ると体力的な衰えは認められるであろうが、剣道修行の長年の経験から、「理合」とか「心法」というものを考えるようになり、さらに剣道の奥の深さ、剣道の魅力、剣道の楽しさを味わいたいとの強い気持ちが湧き出てくるのであろう。この

ことを示しているのが剣道歴群のクロス表である（表5-2）。80%以上の者が稽古会を希望しており、特に剣道歴が20～30年のグループでは87%と高い割合を示している。中・高齢者だけの稽古会実施が強く望まれていることが分かる。

(6) 社会人剣道大会や中・高齢者剣道大会への出場希望について

現在、実業団剣道大会や高齢者武道大会が盛会に開催されているが、これらの大会への出場希望を尋ねたところ、「所属団体以外での稽古」や「中・高齢者だけでの稽古会実施」への参加希望の割合に比べ、表6-1・6-2では、大会（試合）に参加を希望する者としめない者との割合が接近している。剣道歴の各群では、僅かながら大会への参加希望者が多いものの、段位別に見ると三段と五段の者に、希望する者としめない者の割合が逆転している。一方、初段と2段では大会出場を希望する割合が高くなっている。3段以上になってくると、剣道は勝敗を争う試合中心に行うものではなく、稽古中心に実践し心身を鍛練するものだという理解が浸透してくるのであろうか。むしろ、日々の稽古で積み重ねてきた技術、体力、気力を十分に発揮して堂々たる態度で勝負を競い合うのが大会の意義であり、試合の勝敗の中から、己の技術や体力、気力の強弱を知り、さらにスポーツマンとしての立派な態度も育成できるのである。剣道大会に参加し試合を行うことは心身を鍛練する上で貴重な経験となるはずなので、中・高齢期で開始した者でも積極的に試合を行ってもらいたいものである。

表6-1 大会出場の希望と段位

		段位						
		初段	2段	3段	4段	5段	6段	7段
大会出場希望	希望する 70人	5 (83.3)	6 (85.7)	6 (37.5)	9 (52.9)	21 (47.7)	14 (51.9)	9 (47.4)
	希望しない 57人	1 (16.7)	1 (14.3)	8 (50.0)	8 (47.1)	22 (50.0)	11 (40.7)	6 (31.6)
	出場している 8人	0	0	2 (12.5)	0	0	2 (7.4)	4 (21.1)
	経験はある 1人	0	0	0	0	1 (2.3)	0	0
計		6	7	16	17	44	27	19

注) n=136 () 内の数値は百分率

表6-2 大会出場の希望と剣道歴

		剣道歴			
		1～10年	～20年	～30年	31年以上
大会出場希望	希望する 70人	15 (53.6)	21 (48.8)	22 (53.7)	12 (50.0)
	希望しない 57人	11 (39.3)	20 (46.5)	17 (41.5)	9 (37.5)
	時間がない 8人	2 (7.1)	1 (2.3)	2 (4.9)	3 (12.5)
	経験はある 1人	0	1 (2.3)	0	0
計		28	43	41	24

注) n=136 () 内の数値は百分率

次に、社会人剣道大会や中・高齢者剣道大会への出場希望と開始動機との関係をクロス集計によって概観したい（表6-3参照）。警察官等の仕事上の関係で剣道を開始した少人数の者は別として、「健康管理・心身の鍛練」を開始動機とした者の半数が大会参加を希望している。これは、平素の稽古を通して自分自身の健康管理を行うと同時に、大会出場を一つの励みとしてさらに向上しようとする気持ちの現れであろうか。

「子供の開始」を契機に剣道を開始した親達のグループでは、「健康管理・心身の鍛練」を動機として開始した者のグループ以上に、大会参加に積極的である。このグループでは大会への出場希望者がほぼ三人に二人という高い割合を示している。このグループの剣道歴はいまだ浅く低段位の者が多いと思われるが、子供の試合を応援するうちに自分も試合の経験をしてみたくなった者、自分が試合を経験することで、さらに子供とのコミュニケーションを深められると考えている者が多いのではないかと推測される。

表6-3 大会出場の希望と開始動機

		開始動機				
		健康管理・心身の鍛練	剣道への興味	子どもの開始	親・教師・友人の勧め	仕事上の必要性
大会出場希望	希望する 66人	23 (52.3)	7 (35.0)	15 (65.2)	16 (42.1)	5 (83.3)
	希望しない 56人	18 (40.9)	11 (55.0)	8 (34.8)	18 (47.4)	1 (16.7)
	出場している 8人	2 (4.6)	2 (10.0)	0	4 (10.5)	0
	経験はある 1人	1 (2.3)	0	0	0	0
計		44	20	23	38	6

注) n=131 ()内の数値は百分率

逆に大会への参加を希望しない者の割合が多いのが「剣道への興味」や「親・教師の勧め」で剣道を開始したグループである。剣道が日本の伝統文化であることや、体力的要素より精神的要素を中核としていることに興味を持つ者にとって、「剣道の主眼は技術又は勝敗の末にあらずして、技術の練磨によりて心身を鍛練するに在ることを忘るべからず」⁹⁾との剣道観が、彼らに大会出場を敬遠させていると推察される。また、剣道を親や教師に勧められて開始した者の多くは、中高年に至るまでの長年の鍛練により、剣道が勝ち負けを競うスポーツ的要素より勝敗を超越した武道的要素を要求していることに気づき、その結果、試合よりも平素の稽古を重視する傾向が強いのではないかと思われる。

(7) 剣道の海外普及について

剣道の海外普及に関して、その賛否を尋ねたところ、賛成は反対の倍以上であった。剣道の海外普及を望んでいる愛好者が多いということである（表7参照）。次に、開始動機と海外普及の賛否についてクロス集計を行った。割合からすると「剣道への興味」から剣道を始めた人達の中に海外普及を期待する者が多い。日本の精神文化の発露であり、生涯武道と呼ぶに相応しい剣道に対する誇りと確信が、海外普及に積極的にさせているのではないだろうか。

表7 海外普及に対する賛否と開始動機

		開始動機				
		健康管理・心身の鍛練	剣道への興味	子どもの開始	親・教師・友人の勧め	仕事上の必要性
海外普及の賛否	賛成 78人	24 (63.2)	14 (82.4)	16 (72.7)	21 (70.0)	3 (37.5)
	反対 34人	13 (34.2)	3 (17.7)	6 (27.3)	8 (26.7)	4 (50.0)
	不明 3人	1 (2.6)	0	0	1 (3.3)	1 (12.5)
	計	38	17	22	30	8

注) n=131 () 内の数値は百分率

さらに剣道の海外普及に対するコメントを求めたところ、以下のような記述があった。賛成、反対という違いはあっても、剣道の特性を端的に表現しているものが多い。

賛成記述

1. 日本の伝統文化を国際的に評価してもらいたい。
2. 剣道は武道である。日本文化である。この理念を大切にすれば広めても良い。
3. 日本の武道を世界に広めるのは誇りに思う。
4. 剣道を通して心の交流が生まれる。
5. 心技一体で広めていくのが良い。

反対記述

1. 剣道は武道であってスポーツでないので海外に広めて勝敗を楽しむものではない。
2. 剣道を武道としてとらえた場合日本人以外では理解出来ない。
3. 気剣体一致など外国人には理解しにくい。
4. 日本人の心及び伝統が海外の人には理解出来ない。
5. 判定が難しいので普及には限界がある。

(8) 剣道のオリンピック種目化について

剣道の海外普及に対する意識とは全く反対の結果が表8に見られる。この項目に対しても意見を求めたが、さまざまな反対記述がある中で、柔道を引き合いに出した記述が多かった。柔道の試合では、敗者を思いやる気持ちなど全く感じられない勝者の振る舞い（特に、試合場を飛び回って勝利を観客にアピールするガッツポーズ）や監督が判定に対して審判に血相を変えて抗議する姿などが散見される。これらはオリンピック種目となる前の柔道では見られなかった光景である。観客、さらには日本国民が金メダルを期待するあまりに現れてきた選手や監督の仕草ではないかと思われる。

表8 オリンピック参加に対する賛否と開始動機

		開始動機				
		健康管理・心身の鍛練	剣道への興味	子どもの開始	親・教師・友人の勧め	仕事上の必要性
五輪参加の賛否	賛成 25人	10 (32.3)	3 (21.4)	5 (26.3)	6 (21.4)	1 (14.3)
	反対 71人	21 (67.7)	11 (78.6)	12 (63.2)	21 (75.0)	6 (85.7)
	不明 3人	0	0	2 (10.5)	1 (3.6)	0
	計	31	14	19	28	7

注) n=99 () 内の数値は百分率

剣道でも近年、「勝てばいいんだ」という精神的乱れや技術的乱れを感じさせる試合を見ることがある。剣道もオリンピックに参加したら柔道の二の舞になるのではという警戒心が記述に表れていると考えられる。以下は自由記述の一部である。

賛成記述

1. 日本の武道を世界の人々に知ってもらうのに良い機会だ。
2. オリンピック種目に加われば剣道人口が増加すると思う。
3. 柔道のようにならなければ子供の夢をかきたてる有効な材料になるので良い。
4. 少年指導をしているので子供達に夢をもたせてあげたい。

反対記述

1. 勝負にこだわりすぎるようになる。スポーツ化して「道」の重さがなくなる。
2. 柔道がレスリング柔道と言われるように剣道も異質なものになると思う。
3. 剣道は自分の心身の陶冶の為に修行するもので、オリンピックに加えるべきものではない(オリンピックは勝負を争うものだから)。
4. 伝統の理念が失われる為反対。
5. 日本古来の武道の本質が失われる、柔道のように。

4. 考察

いくつかの武道種目の中でも剣道は、年齢と体力に応じた稽古を効果的に行うことによって高齢になっても実力の向上が可能な種目である。これは剣道が、「精神的要素を中核として、身体的要素よりも技能的要素にその大部分を要求している」⁽⁴⁰⁾からであり、体力的に衰えを感じている中・高齢者が開始したとしても実力の向上が望める。これは今回調査した、剣道愛好者の55.1%にあたる81名が30才以降で剣道を開始しており、その中で五段に31名、六段に11名、七段に4名と約半数の者が高段位に昇段していることから認識されるであろう。この高段位に昇段した割合を見ても、剣道が高齢になっても実力をつけつつ、元気な青少年たちとも一緒に稽古を楽しめる武道であることがわかる。

また、「剣道はその競技年齢が長く、技能的には高いものを要求し、その到達に困難性の多いスポーツであるから、剣道愛好者にとって、その興味はいつまでも持続される」⁽⁴¹⁾というが、これも、30年以上剣道を継続している者が全体の17.6%にあたる26名もいることから納得でき

るであろう。さらに、「生涯武道として継続できると思うますか」との質問に対して、「自分の年齢なりにできる非常によいスポーツと思う」、「継続したい・定年後も生活の節目や糧としたい・継続できるよう健康に配慮する」等の記述があるが、これなどは、剣道が理想的な生涯武道であることを物語っている例といえよう。このように剣道は、高齢になっても実力を向上させることができ、競技年齢が長く生涯武道として親しまれているが、これも平素の稽古の積み重ねによって可能になるもので、質問項目に対する記述からも、愛好者の多くが積極的に稽古に取り組んでいることが分かった。なお、海外普及に関しては、日本の伝統文化の国際的な評価に期待して普及を望む者が多いが、一方、オリンピック種目に組み入れられることに対しては逆に反対者が多い。金メダルにこだわる国民によって、剣道が「剣道の理念（剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である）」から引き離なされてしまうのではないかという不安の表れと窺える。

5. まとめ

一般的な習い事と同じように、剣道も稽古の積み重ねによって上手にもなり、強くもなるもので、剣道に対していくら理論的な理解があろうが実践無くして、剣道の本筋は見えるものではない。しかし、実践が大事であるとはいえ、単に稽古の回数を増やせば良いというものでもない。自分の理想とする剣道像を描き、目標を立てて、健康状態に十分な配慮をした上で年齢相応な稽古の事理一致・心技一体の修練が上達へと繋がるのである。

今回の調査の対象者には、30代に入ってから剣道を開始した者が半数以上もいる。剣道の開始時期や開始動機がさまざまな中・高年齢の剣道愛好者であるが、彼等は剣道に生き甲斐を感じ、理想的な生涯武道として意欲的に稽古に取り組んでいる。この調査から、剣道が稽古を通し心身の鍛練や健康管理に効果をもたらし、人間関係の醸成に役立てる武道であることが認識されると思う。

剣道の海外普及やオリンピック参加に対しての質問項目を設けたのは、筆者が常々、若い剣道関係者や剣道関係以外の方々からこの件を尋ねられていたからである。数多くの自由記述を頂いたが、どの記述からも、心より剣道を愛し日本の伝統文化を守りたい、との気持ちが感じ取れた。この拙論が、これから剣道を開始しようと考えている人達に何等かの有益な示唆を与えることができれば望外の喜びであるが、筆者にとっては今後、中・高年齢者を指導する際の貴重な資料となるものである。

引用・参考文献

- (1) 中村良三・他 (1997) 武道人口を考える① 日本武道館『武道』332号, pp.42-51
- (2) 財団法人全国老人福祉助成会 (2000)『第22回全日本高齢者武道大会プログラム』p. 21
- (3) 拙稿 (2000) 中・高年齢の剣道愛好者における剣道稽古に関する意識・実態調査 『創価大学教育学部論集』第48号, pp.77-87
- (4) 同上
- (5) 全日本剣道連盟 (1985)『幼少年剣道指導要領』p. 78
- (6) 同上
- (7) 持田盛二 監修 (1970)『図説剣道辞典』p. 284
- (8) 三橋秀三 (1972)『剣道』p. 156

- (9) 高野佐三郎 (1918) 『剣道』 p.9
- (10) 村上・阿部 (1967) 『写真と図解による剣道』 p.9
- (11) 同上

付記) 本研究の調査に際して、西東京剣道連合会加盟団体の会長並びに剣道愛好者の皆様にご協力を頂いた。また分析の段階から本学教育学部の関田一彦先生には貴重なご助言を頂いた。衷心より感謝を申し上げたい。

A Survey of Middle-aged and Elderly Kendo Players'

Concerns about their Practice II :

Their Attitude toward the Overseas Diffusion of Kendo

Susumu SHIMURA

This paper talks of the second part of a survey research about elderly kendo players' and their concerns. The first part of the analysis was previously presented in the Soka University Bulletin of The Faculty of Education, No.48.

The total number of subjects was 147 although all the respondents did not answer each question. They were all males with their age ranging from 30's to 70's and good kendo players. Each one was a black belt holder. They all agreed that as a sport kendo could be practiced life-long. They further expressed their wish to continue their practice as long as they could play.

Out of 115 respondents, 67.8% had a positive outlook towards the overseas diffusion of Kendo ; Kendo is a Japanese traditional martial art and the overseas diffusion of Kendo is an appropriate way to inform the world about Japanese traditions.

Where as in contrast, out of 99 respondents, 71.7% did not want Kendo to be entered and contested in the Olympic events ; Olympic events are emphasized too much on winning and losing competitions. Kendo is not just a sport, but an art too. By being contested in Olympic events, Kendo might deteriorate in essence just as the underlying art in Judo is lost now.

In short, many elderly players have enjoyed their practice and have made a steady progress in Kendo. Many of them tend to seek a sort of spiritual fulfillment through Kendo, therefore they are reluctant to allow the art of Kendo to be commercialized and contested in the Olympic events.